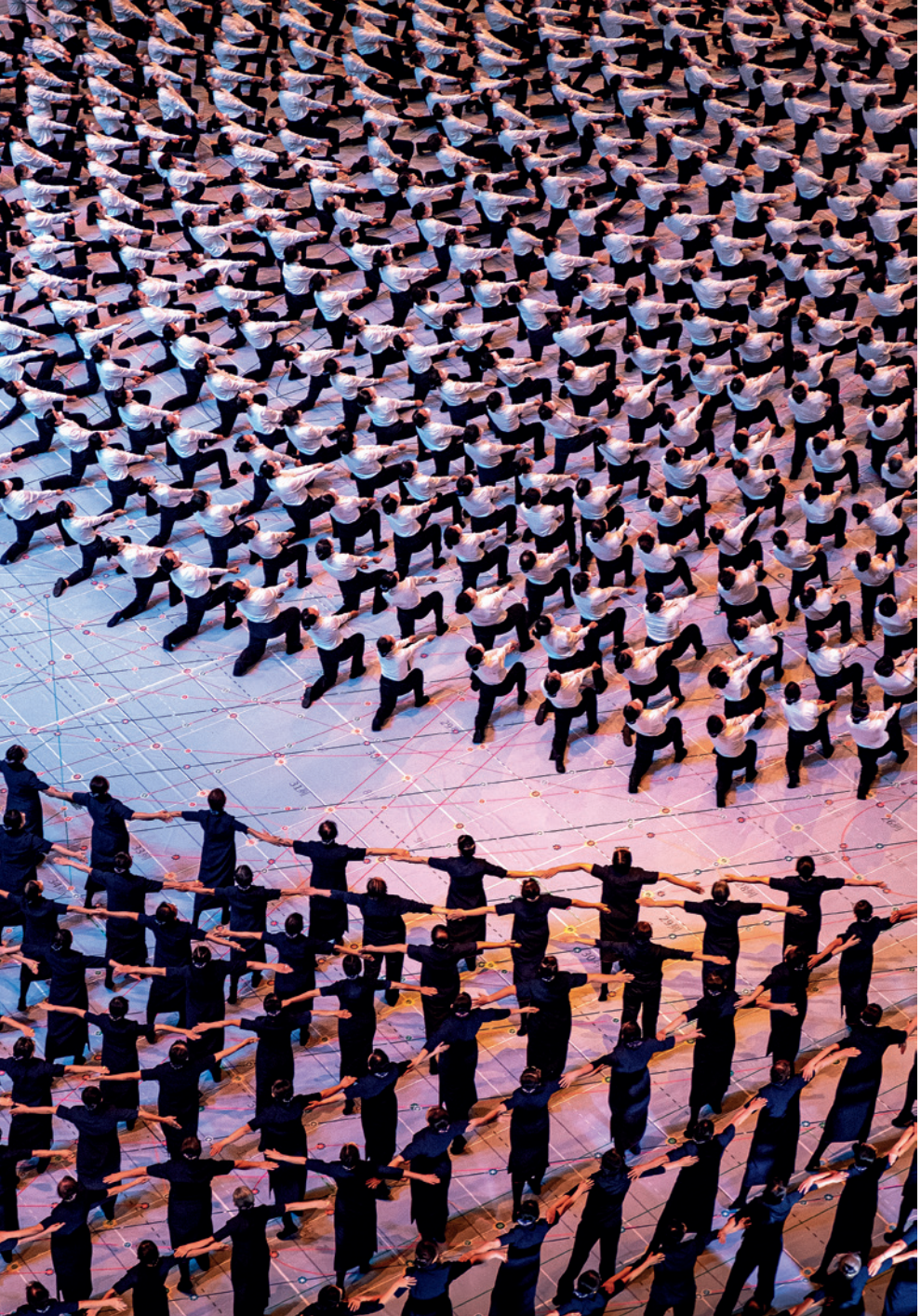
慈済ものがたり

共生　助け合う未来を願って



二〇二三年歳末祝福会のテーマ

弘法で衆生を利し、信心を持って願を実践し
菜食による共善で、大地を護りましょう

慈済日本サイト

目次

【編集者の言葉】
奥深い仏教音楽と伝統舞踊で仏の徳を讃嘆　善耕／訳　4

【特別報道】助け合う未来を願って
共生（下編）　済運／訳　8

【大地の守護者】
強靭なガラスのような人生　施燕芬／訳　28

【今月の特集】
台北アリーナ・経蔵劇　無量義　法髄頌
舞台芸術が媒介　互古の真理を演じる　御山凛／訳　44

【證厳法師のお諭し】
親心と菩薩心　慈願／訳　60

【農禅生活】
「手袋型」の食器洗いスポンジ
公私混同しない　心嫈／訳　66

【グローバル慈善】
ロシア・ウクライナ戦争から避難してきた高齢者
ワレニキクラブ運営中　御山凛／訳　72

インドの旅
喜びも悲しみも書き尽くせない　明澔／訳　86

【命の贈り物】
阿毛と私　江愛寶／訳　95

【行脚の軌跡】
良い縁を結んで、煩悩を断ち切る　済運／訳　100

十二月の出来事　済運／訳　106

表紙

日本の「デイサービスこのゆびとーまれ」には、高齢者も子供も身障者も通う。このように、入所者を分けずにケアする方式は、後に政府から「地域共生」の模範とみなされるようになった。超高齢化社会に直面する今、国民が、将来は政府に頼るだけでは生活できないので、各自が貢献して助け合う地域社会を作り、皆の拠り所として大切にしていく必要があると感じている。

奥深い仏教音楽と伝統舞踊で仏の徳を讃嘆

◎訳・善耕

十月下旬になると、「何日の何回目の経蔵劇に参加しますか」という言葉が、多くのボランティアの間で挨拶になった。

公演の舞台規模がミュージカルにも引けを取らない「慈済の経蔵劇」は、事相や仏教の真理を伝える方便法門だと言える。一方で、芸術と文芸の美を融合させた荘厳な法会でもある。そして、それ以上に、證厳法師が片時も忘れることがない、人間（じんかん）仏教を広めるために、プラットホームとしての役割を果たす。

数年前に花蓮慈済静思堂で上演したのを皮切りに、高雄ドーム、彰化県立体育館から今年十月の台北アリーナに至るまで、慈済は、その半世紀以上にわたる志業の発展と《法華経》、《無量義経》を融合させた大規模な経蔵劇を企画し、演出チームが調整と修正を重ねた最新作が、四日間続けて十回公演された。舞台下の「法海」エリアと「大愛の光」エリアでは、毎回二千五百人以上の慈済ボランティアも参加した。更にオンラインで即時配信され、世界中の人々がリアルタイムで参加することができた。

いわゆるミュージカルとは総合的な舞台芸術であり、歌、演技、ダンス、音楽と衣装、道具、舞台、マルチメディアデザインなど多元的な美を統合したものである。中国の伝統的な演劇である崑曲や越劇、京劇或

いは台湾オペラなどは、舞台でのセリフと合唱、音響、動作、道具などは多少類似しているが、剛柔の表現、虚実性、ステージ規模においては程度や境地の差がある。

西洋のミュージカルは、華麗で具象的且つ写実的だが、中国の伝統的演劇は、簡潔で抽象的且つ写意的な表現方法をとる。いずれにせよ、このように、音楽と演劇による演出で歴史や生死を超越した仏法を表現することは、感染力のある説法だと十分に言える。また、大衆や若者にも受け入れられ易い。

最初の十年間の慈済手語による演出から、その後の十年間の大規模な経蔵劇に至るまで、慈済は二十年にわたって音楽と演劇による説法モデルを開発してきた。近年の経蔵劇『静思法髄妙蓮華』や『無量義　法髄頌』は、益々完成度を高めていると言える。元来は自作の曲にボランティアによる慈済手語の動作を組み合わせたものだったが、その後、プロの芸術文化団体に協力を仰ぎ、ボランティアを訓練して舞台の上下を融合させ、一緒に演じるようになった。整然とした動作は敬虔な心を伝えていると共に、奥深い仏教音楽と伝統舞踊でもって、仏の徳を讃えている。

「静寂清澄、志玄虚漠、守之不動、億百千劫」という部分は、《無量義経》の精髄である。経蔵劇は慈済の法髄と芸術文化の精髄を組み合わせており、「無量義」の心境と境地を伝えている。数カ月にわたって稽古に精進し、公演に参加した菩薩らの誠意は、人々の心を強く揺さぶる。仏教徒であるか否かに関わらず、見る人の役に立ち、感動を呼び起こす。

（慈済月刊六八四期より）

共生 下編

助け合う未来を願って

富山県富山市にある「デイサービスこのゆびとーまれ」には、高齢者も子供も身障者も通う。

このように、入所者を分けずにケアする方式は、後に政府から「地域共生」の模範とみなされるようになった。

超高齢化社会に直面する今、益々多くの国民が、将来は政府に頼るだけでは生活できないので、各自が貢献して助け合う地域社会を作り、自分と大衆のための拠り所として大切にしていく必要があると感じている。

撮影・安培淂（経典雑誌撮影部主任）
文・呉佳珍（経典雑誌記者）　訳・済運

先ず民間で「地域共生社会」を推し進める

三年間のコロナ禍で、介護施設はどこも大きな局面を迎えた。廃業したところもあったが、惣万さんは今でも、「人口一万人の地域につき、一軒の富山型デイサービスがあれば、日本はもっと住み易くなる」と信じている。そして、それ以外に、実は一般の介護施設も存在して初めて、大衆に選択肢が増えるのだという。

充実した講座に通って優雅に日々を過ごしたい人もいれば、にぎやかに人々と交流したい人、一人で静かに過ごしたい人もいるので、人それぞれ自分に合った過ごし方を選ぶことができるのである。

富山型デイサービスをもっと普及させるために、惣万さんは「富山ケアネットワーク」を立ち上げた。それによって、経営者たちが経験や専門テクニックを分かち合うと共に、創業育成講座を開いたりして、富山型デイサービスの養成基地となっている。

しかし、その先駆者たちは率直に、制度に取り入れられると、「経営」目的で立ち上げる人が出てきている、と言う。例えば、富山型デイサービスをうたいながら、逆に政府補助が多くもらえる高齢者だけを受け入れたり、異なった部類の人たちを別々のスペースでケアしたりして、本来、惣万佳代子さんの「あらゆる人を受け入れる」という初心からはかけ離れたものになっている所もあるそうだ。

富山型デイサービスは、三人の介護士が困難を伴って歩んで来たが、後に大衆の支持を得るようになって、地方と中央政府の硬直化した制度を変え、今では全国に開花するまでになっている。もし、これら一切が二十九年前、民間によって改革がもたらされたのでなければ、恐らく「共生ケア」または「地域共生社会」の実現はもっと長い時間を要していただろう。

台湾は二〇二五年に、六十五歳以上の人口が二割を超え、五人に一人が六十五歳以上という超高齢化社会に突入する。しかし、日本は二〇〇七年という早い時期に超高齢化社会に入っており、二〇二五年には三割を超えて、十人中三人が六十五歳以上になると予測されている。

日本は一九九〇年から長期介護サービスが始まり、二〇一二年に「地域包括ケアシステム」を推し進めた。医療や介護だけでなく、住居や生活面でも支援と予防を

●親子館はどう見ても子供に活力を発散させる場所にしか見えないが、実はコミュニティスペース「だれでもハウス“めぐみ”」は、じっくり相談することで、育児に悩む親のストレスを和らげる手伝いをする場所だ。

対象に取り入れ、高齢者に「地元で老いる」ことができる環境を整えられることに期待している。台湾の長期介護2・0プロジェクトは日本を手本にしたものである。

しかし、これまで述べて来た対象は高齢者に限ったものだが、実務的には二重ケアや身障者ケア、引きこもり、登校拒否、育児問題などに関わっており、異なった支援体制とサービスの間を有効的に穴埋めできないと、ギャップが生まれ易くなるのである。

それに加えて、政府は将来の財源と人材不足を見据えて、二〇一六年に「地域共生社会」という目標を掲げた。元からあった「ケアされる側」と「ケアする側」の境界線を打ち破る構想によって、個人の地域社会での役割を喚起し、地域の連携を強めようとしている。

しかし、政府が共生を目標に掲げる前から、富山県では政府に頼るだけではいけないと気づき、自主的に「誰もが安心して暮らせる環境」を作り、自分のためにも大衆のためにも帰属感を探し出そうとしていた人たちがいた。

登校拒否の子供が来る「シェルター」

生活感に溢れた二十平米余りのスペースに、十数人の子供と大人がにぎやかに話をしていた。高岡市の「コミュニティーハウスひとのま」は形容が難しいスペースである。住宅のようだが、誰もそこに住んでいるわけではなく、コミュニティーの交流の場のようで、特に決まった活動があるわけでもない。また、社会福祉機構のようにも見えるが、ソーシャルワーカーや心理療法士を見かけたことはない。NHKが一年がかりで撮影して番組を制作する魅力があるのは、一体どういう場所なのか？

ここによく出入りする「決まった人たち」とは、登校拒否の子供や引きこもりの青年たちが多く、時には近所の一人暮らしのお年寄りや帰る家のない人、ご飯を食べるお金のない人もやって来て、モバイルゲームを遊んだり、休憩や仕事探したり、食事の用意をするなど、自分のしたいことをして、お喋りをしている。この十一年間、人々は自然とそこを「シェルター」として利用し、新たな人生を出発する日を待っているのだ。

日本では登校拒否の子供が年々増加し、今年も記録的になっている。例を挙げると、女子高校生である小春もその一人で、小学生の時に母親に連れられて「ひとのま」にやって来た。ある日突然、「自

分に問題はない」と感じ、再び学校に戻って行った。今年、「ひとのま」は丸田颯人さんを新規雇用した。彼は臆病で六年前から登校拒否を続けていたが、今は爽やかな青年に変身した。

「私はこの家を開け放っただけです」と三十九歳の責任者である宮田隼さんは簡単に言ってのけた。塾の先生をしている彼は、よく登校拒否や引きこもりの子供に出会う。そこで、この二階建ての家を借りて、皆で休息できるようにした。鍵を掛けることもなく、年中開けっ放しである。

●コミュニティスペース「ひとのま」には、よく登校拒否の子供が母親に連れられて「登校」して来る。

時には、心配でたまらない母親が登校拒否の子供を連れ、宮田さんに「助けてくれ」と言って、「ひとのま」にやって来る。本人は何も語らず、皆も何も聞かない。ある日突然、宮田さんはその子が他の人とテレビゲームのことを話しているのを目にした。そこから無意識に、なぜ学校に行きたくないのかを話し始めたのだ。

「最も大事なのは『自然と』出てくるもので、その後は待つしかなく、本人が安心感を持てば、悩みを話すようになります」と宮田さんが言った。

自治体の社会福祉機構や警察でさえ、よく宮田さんに頼って来る。例えば、刑務所を出所したばかりで行く宛のない人やDVで家に帰れない母子など、この部類は行政の立場では解決することが難しい。かと言って知らない顔をすることもできない。しかし、ここでは解決方法が見つかるかもしれないのである。

「少なからぬ人は、私を『行政の隙間を埋める人』と言いますが、私はただ、手伝えるものは精一杯やっているだけです」。彼は次のような例を挙げた。「お腹が空けば、『ひとのま』には食べ物があります。住む所がなければ、二階に泊まればいい。仕事を探す時に電話番号が必要なら、私の番号を使ってもらっていま

す。私に解決できないことは債務のようなことですが、解決できる人を探す手伝いをします」。

近年、宮田さんはよく表彰されるが、いつも「家を開け放っているだけです」と言う。彼が開け放っているのは家の玄関だけでなく、地域の人々の心も開け放ち、行政と専門の垣根を取り払っていることである。

心細さを繋げて助け合うネットワークにする

六十七歳の加藤愛理子さんは、より多くの人たちが交流できるように、と自宅の庭を開放した。彼女は両親と自分の老後を考えて、八年前に砺波市（となみし）に引っ越して来た。友人の水野薫さんと、庭に普通とはちょっと違う「みやの森カフェ」を開店した。初めの目標は介護者の息抜きと交流の場だったが、思いも寄らず、二人が学んだ特殊教育の背景から、特殊児童や登校拒否の子供をもつ家庭の

●「ささえるさんの家となみ」では、臨床美術講座を始める前に、皆で先ず体をほぐす体操をする（上）。「にほんご広場なんと」の高齢者は外国人に日本の将棋を教えながら日本語で交流する（下）。

親たちが相談に来るようになり、やがて子供連れで「登校」する人も出て来たのだ。その後、引きこもり族や求職が上手くいかない青年などの耳にも入り、地域の「ケアカフェ」から「多元的カフェ」になっていった。

「みやの森カフェ」は、地域内の相談所のようだ。かた苦しい場所ではなく、食事やアフタヌーンティーがとれて、リラックスして悩みを打ち明けることができる。往々にしてそういう方法で悩みは解消しやすくなる。「私たちは主に話を聞いて、それを整理して、誰それと会ってみるよう提案しています。問題の解決はやはり本人しかありません」。加藤さんと水野さんは惜しまず、自分たちの豊富な人脈を人にも紹介し、コミュニティーで助けを求める人たちを一人ひとり繋げて、力強く助け合うネットワークにしている。

「私たちは小さな拠点でしかなく、大したこともしていませんが、面白いことをいっぱい試してみることはできます」と加藤さんが言った。そうだからこそ、より多くの人を啓発して自分たちが幸福になると共に、皆にも幸福な空間をもたらしているのかもしれない。

例えば、「ささえるさんの家となみ」は、病院事務員だった鷲北裕子さんが三年前に自宅の古い家を改装した「臨床美術」教室で、地域の中高齢者に普通と違った療養する場所と時間を提供している。

「以前、私は美術がとても嫌いでした。しかし、臨床美術に出会ってから、自分を認めることを学んだだけでなく、あのような高揚感は私の癌細胞を少なからず殺してくれたのです！」乳癌を患っていた鷲北さんは、九十歳の母親と共に臨床美術の奥深さを心から体験したため、もっと多くの人にこの喜びを体験して欲しいと思った。

介護や登校拒否だけでなく、近頃、育児の悩みがよく討論されるようになっている。「だれでもハウス～めぐみ」は正にこのような問題に対応する場所として誕生した。どう見ても「育児」に特化した親子館のように見えるが、実はママのストレスを和らげるのを手助けする空間なのだ。

かつて託児所の所長をしていた木下三貴子さんは、子供の問題の多くは家庭が原点であるため、問題を解決するなら、両親から手を付けなければならないことに気づいた。彼女は平日の朝、そこを親子に開放した。遊戯などでリラックスして、ついでに相談してもらっている。また、地域の高齢者ボランティアも一緒に

そこで過ごしている。設立して何年にもなるが、利用代は清掃費の百円だけで、相談は無料である。

「もし、その時ここに来なかったら、私は子供を殺していたかもしれません」とある母親が木下さんに過去の苦痛を打ち明けたことがある。今その子は既に大学生である。彼女は十一年前にここを開設したことは正しかったのだ、と嬉しく思った。それにこの仕事は好きなことなのだ。

政府は、「地域共生社会」を推進することで、大衆がこれ以上政府の「公助」や社会保障制度の「共助」に頼らず、個人の「自助」を重視して推進し、地域の「助け合い」に発展させていきたいとしている。自分たちの居住区なのだから自分たちで努力することを受け入れる人もいるが、それは政府の責任回避だと考える人もいるそうだ。

長年、南砺市の地域共生を手伝ってきた前南砺市民病院の院長は、今は南砺市の市政顧問を務めているが、「政府が責任者であることに違いはありませんが、

●富山県南砺市では、住民の自治と自治体の支援の下で、コミュニティーの組織が発展しており、心細い個人個人をつなげて助け合いネットワークを作り上げている。一人暮らしのお年寄りが支援を求めた時、周りも直ちに支援の手を差し伸べることができる。

地域住民こそがそこに住んでいる関係者であり、より地元のことを理解しています」と言った。

「自治体は怠けているわけではなく、公助と共助の基盤を固めると同時に、住民の自助と助け合う精神を呼びかけることに務めています。しかし、横から見守っているとはいえ、必要な時には全力で支援します」と南砺市（なんとし）の田中幹夫市長が言った。

同じく地域共生を後押ししている富山大学付属病院総合診療科の山城清二名誉教授は、医療人材不足を感じ、二〇〇九年に「地元人材養成講座」を開設し、地域住民を主体に、これまで五百人を超えるシード部隊を培い、自治体と地域社会の掛け橋となってきた。最終的に投入した人は十分の一しかないとは言え、皆依然として橋渡しの手伝いをする仲間になっている。

八年前、「ほっこり南砺」というコミュニティースペースを作った中山あけみさんは、当時の講座に参加していた実践者の一人である。彼女が講座で学んだのは具体的な方法だけでなく、「未来に対する想像力」だった。また、コミュニティースペースの経営者として人助けする以外にも、自分の心を豊かにし、多くの人と交流できるというお金では買えない収穫もあるという。

「私は日本人だというのに、日本語は難しいと感じます。ましてや外国人は尚更そうでしょう」と熊本県から来た前田啓子さんが言った。富山県に来た当初は方言に苦しんでいたと同時に、フィリピン人の友人ができ、十二年前に思い立って、「にほんご広場なんと」を開設した。そこでは、外国人技能実習生と地域の高齢者が交流しながら日本語の勉強をしている。

外国人技能実習生にとって、普段は工場で働いているため、あまり日本語を話す機会がない。一方、高齢者は以前、顔つきの異なる外国人を見ると怖いと思っていた。しかし、地元の各種活動に参加した時に、語学が学べることを知ってから、お互いの距離が縮まった。「日本人であれ、ベトナム人またはインドネシア人であれ、この地域で生活している以上、相手をもっと知ることは良いことだと思います」と前田さんが言った。

「地域共生社会」や「助け合い」は政府の政策を宣伝する時のうたい文句のように聞こえるが、実際は一人残らず、皆が手と手を取り合うことではないだろうか。

●高齢化、少子化、核家族化といった社会では、以前は支えとなっていたシステムも将来は通用しなくなる。助け合いのみが長く続く道なのである。

ある日、「デイケアハウスにぎやか」で、昼食時に突然、激しく咳き込む音が聞こえた。実は、「ジャンちゃん」と呼ばれていた六十四歳の脳性麻痺の女性がむせたのだ。職員が駆けつける前に、合わせて百八十歳になる、側にいた二人のお婆さんが直ちに、子供を落ち着かせるように彼女の背中を軽く叩いた。彼女たちはお互い、血縁関係のある家族ではないが、共同生活をして、助け合っている家族なのである。

「時にはケアする人であり、時にはケアされる人になるのです。これが幸福ではないでしょうか」と九十三歳の菅お婆さんが淡々と言った。幸福とは簡単であると同時に、実に簡単ではないのだ。

（経典雑誌二九三期より）

大地の守護者

台中市 呉貞葉さん

強靭なガラスのような人生

◎文・黄筱哲、蔡瑜璇　撮影・黄筱哲　訳・施燕芬

小柄な彼女の姿は直ぐ目に付く。何故なら、立ちあがっても彼女の身長は僅か一メートル三十センチくらいで、二本の松葉杖で支えてはじめてゆっくりと前進することができるからだ。よく見ると、彼女の顔や両手の多くのところが変形している。にもかかわらず、彼女は自分の外見や動作を少しも気にすることなく、回収資源の分別に全力を尽くしている。

台中市長安リサイクルステーションのボランティアである呉貞葉（ウー・ツンイェ）さんは、台湾では俗に「ガラス人形」と呼ばれる、骨

形成不全症を患っている。彼女の話によれば、九歳まで五体健全で、活発な子供だったそうだ。ある日、田んぼで楽しく遊んでいたところ、不注意で転んで、左の大腿骨を骨折した。その時、国術館整骨院に運ばれたが、一カ月が過ぎた頃になって接合した骨の歪みに気づいた。再び、整骨院へ行って、繋がっていた骨を強引に切って繋ぎ直された。その時の激しい痛みは彼女の人生において忘れ難いものになった。

側で聞いていても唖然となるような、でたらめな治療法が、あろうことか子どもの身に起きたのである。彼女は遺伝的に先天性の欠陥があるとは言うものの、一般の人よりもずっと「楽観的で朗らか」な性格をしている。そして、常に笑顔を絶やさず、自信を持って積極的に人と接している。彼女の骨がガラスのように脆くても、心はガラスのように透き通っていて、煌めく光明を放っているのだ。

今を逃さず、甘んじて行う

呉さんは、多くのリサイクルボランティアと同じように、地球を守るために、奉仕する機会を大切にして、全力で投入している。最初、彼女は三輪バイクで近所のなじみのある店を回って資源を回収し、載せられるだけ載せていた。リサイクル拠点が撤収された後、彼女も体力的に重いものを運べなくなったこともあり、ステーションで資源の分別をするようになった。

他人から見ると、リサイクルステーションの方が、「ガラス人形」にとってより危険な場所であり、常にぶつけられないよう注意していなければならない。しかし、彼女にとって、リサイクルステーションは大きな宝物殿に見えるので、自分の体の制限を忘れて、生まれ持った能力を最大限に生かして奉仕しているのだ。時にはビニール袋の材質を仕分けるエリアで手伝ったり、時にはペットボトルのキャップリングを取り除いたりしている姿が見られる。また、分別作業を終えると、ほうきをもって清掃を手伝うこともある。

体の様々な苦しみと試練に対して呉さんは、超然とした処世哲学を持っている。「前世の因を知りたければ、今生で受けている果を見れば分かり、来世の果を知りたければ、今生でそれを作る」ことを彼女は固く信じている。従って、眼前の機会を逃さず、甘んじで行えば、喜びが得られるのだ。

障害のある体で恩に報いる

呉さんは週に二日、長安リサイクルステーションへ資源の分別をしに行く。時間の都合さえつけば、八十四歳の母親を連れて行く。呉さんは身長が低く、身体や動きに制限が多いが、様々な困難を克服して、安全を確保しながら、三輪バイクで母親を送迎している。彼女は、細心の注意を払い、母親をバイクに乗せる手間を厭わない。

彼女は学生時代、健康が不安定な上に、骨折する確率が高く、怪我による治療や自宅療養をした日数は数え切れないほどだった。小学校を卒業しただけの母親は、紙の媒体やテレビなど生活の中で、様々な方法を使って娘に字を教え、自分で書き方や勉強の復習をさせることで、学習できなかった分を補った。呉さんは感謝の気持ちで、「母は私に対して一度も諦めたことはありません。彼女は私の人生で最高の先生です」と言った。彼女は体の欠陥を恨まないばかりか、親から授かった体をより大切にして、今世で役に立てている。母親が慈愛でもって娘に寄り添ってくれたことに、彼女は実践して親の恩に報いている。母と娘の互いへの思いやりが、愛の流れと循環になって見えただけでなく、智慧に溢れた温もりも感じられた。

普通の人と同じような生活を送る

呉さんと一緒に彼女の自宅に行くと初めて、彼女の普段の生活が一般の人とあまり変わらないことに気づいた。同じフロアの平面空間では、松葉杖の代わりに車輪付きの回転椅子を利用していた。手や足で軽く推せば簡単に移動できるのである。床の掃除やモップがけ、家具の拭き掃除、洗濯や料理など、ありとあらゆることが彼女を困らせることはない。また、呉さんは若い頃、手芸教室で裁縫技術を習得した。それから数年間にわたって他の所で仕事に就いていたが、結婚してから自宅に戻って、他人の服をお直しして家計の足しにした。

裁縫部屋に入ると、幸せそうな結婚写真が壁にかかっているのが目に入った。しかしそれは、幸せそうに見える背後に、彼女が言葉に言い表せないほどの苦難を経た後にやっと取り戻した笑顔だった。当時二十七歳だった彼女は夫と出会って間もなかったが、乳がんに罹り、再び大きなショックを受けた。幸いなことに、治療を受けて順調に健康が回復した。その後、二人は結婚し、二十九歳の時に娘を産んだ。呉さんは、幸運にも彼女を厭わない夫に出会ったことにとても感謝している。夫は結婚前からずっと付き添って世話をし、一緒に家庭を築いてくれている。一般の人と同じような生活が送れることは、最高の幸せだと思っている。

強靭なガラスの人生

集合写真の中の幼い頃の自分を指さして、呉さんは、「これは子どもの頃の私ですが、体はまだ変形していません。その時は怖い物なしで、どんな遊びもしていました」と言った。いま、五十七歳になった彼女は、頭から両手両足に至るまで変形し、数え切れないほど骨折した上に、腫瘍の増殖などの試練はまるで煉獄にいるような苛みと痛みを経験してきた。しかし、それは呉さんを打ちのめさなかったばかりか、それらを自分の運命として受け入れ、楽観的で勇敢かつ善良な本性を示すことで、人々を度するに相応しい、模範的な菩薩となったのである。

またある時、心が晴れない友人に付き添っていた時、何時間も話をした後、力いっぱい立ち上がったら、思いがけず不注意でまた骨折してしまった。いわゆる「三回腕を折れば、良医になれる」という諺のように、何度も骨折を経験してきた呉さんは、ジャケットをアームホルダーの代わりにして患部を固定した。子供を亡くして乗り越えられないでいたその友人は、呉さんの姿を見て涙が止まらなくなり、元気を出そうと心に決めたのだった。

呉さんは、自分の身に起こったことでもって多くの人を感化し、知らないうちに家族にも感動を与えてきた。今、娘が自主的にリサイクルステーションへ行って手伝っているのは、美と善の継承だと思う。彼女の歩んできた人生はいばらの道だったが、価値のあるものだったとつくづく感じる。なんと強靭なガラスのような人生なのだろう、と感服せずにはいられない！（慈済月刊六八〇期より）

■今月の特集■

台北アリーナ一経蔵劇
無量義　法髄頌

編集・編集部　訳・御山凛

慈済は五十七年来、『無量義経』の大道を歩み続けてきた。その道のりに芸術的とテクノロジーによる演出を組み合わせ、延べ二万人余りのボランティアが参加して捧げた台北アリーナでの十回公演は、ライブ配信により全世界に仏法の美を呈示し、響かせ、感動の渦を巻き起こした。

（撮影　蕭耀華）

舞台芸術が媒介

亙古の真理を演じる

精深な宗教の道理は、どうすれば大衆にとって分かりやすくなり、受け入れてもらえ、かつ広められるだろうか。古くはシンプルな「語り歌う芸術」として始まり、現代に至っては大々的な「音楽と演劇」で表しているが、純粋な舞台芸術の鑑賞という視点に加えて、実はもう一つの立場がある。自ら経蔵に「参加」することだ。

文・李委煌　訳・御山凛

古くから大衆の信仰対象は、往々にして天地や自然であり、未知への敬畏、探索から来ている。例えば知識が多くなかった時代では、神々や祖霊を象徴する「仮面」を借りて物語や人天の理を伝えることは、人類の宗教芸術の中における道具の始まりとも言える。神秘的な力や未知の世界との交流方法を示して来ただけでなく、日常生活の娯楽機能としての役割も担っていた。

人類の舞台芸術の発展を振り返ると、古代の宗教儀式では、特に音楽やダンス、演劇等の要素を伴ったものにまで遡ることができる。そして宗教を信仰すること自体、舞台芸術に一層豊かな物語と意味を賦与して来た。

ヨーロッパでは十七世紀から音楽ではオラトリオという楽曲様式が始まり、著名な作品『メシア』や『エリア』は、『聖書』を題材としたことで誰にでも馴染み深い曲となった。古代インドから今日まで伝わっているサンスクリット劇や、韓国の無形文化財である「僧舞」等は、どれも宗教が各地域の伝統音楽或いは演劇、ダンスに影響を与えたものである。そして、宗教そのものの道理と物語、修行の考え方もさまざまな方法で解釈され、伝達されてきた。

仏教を含めた宗教の道理は、一般の人にとっては確かに奥深い。そのため大衆に容易に理解できる方法で伝えることが殊更重要である。

漢の時代に仏教が中国に伝来すると、かつて各王朝で見られた変文、宝巻、俗曲、講唱等の表現形式は、仏法が広まった時代に、万人に親しまれるようになっ

た。時代が進むにつれ、比較的早期のシンプルな「唱導（しょうどう）芸術」に始まって、今では異なる形式で芸術的に演じられている。大衆もパフォーマンスを鑑賞するだけでなく、別の角度から経典に「参加」することができるのである。

万人向けの方便法門

仏の教えを舞台芸術で表現するのは、それが一種の「方便法門」であると共に、比較的現代人に受け入れられやすい方法だからである。

１９９９年から、慈済は次々と音楽手語劇で仏典の奥意を芸術の方法を用いて体現し、２００７年『清らかさ・大愛・無量義』の音楽手語劇は、台湾全土で３７回公演され、仏教に触れたいと思っていた大衆のために開かれた方便法門となった。（撮影・黄威然）

ブロードウェイ風に演出された英語版の『ミュージカル・シッダールタ』は、仏光山の星雲（シンユン）法師の著作『釈迦牟尼仏伝』をもとに改編したもので、今まで全世界で十年以上、百八十回余り上演しており、既に五代目の俳優へとトレーニングのプロセスが継承されている。マレーシアには、『観音に出会う』(Guan Yin the Musical)、『釈迦牟尼仏伝』、『薬師如来』、『天心月円』等の仏教音楽劇がある。これらの総合的舞台芸術として上演される宗教物語は、若い俳優の生き生きとした演技によって、多くの音楽劇を好む若者を惹きつけている。

舞台芸術と仏教経蔵を融合させた慈済の音楽手語劇は、一九九九年の『三十七道品』に始まった。それはブッタが世人の心に存在する煩悩を調伏する三十七種の方法を語った内容で、演出は静思慈済手語チームが受け持った。後の『父母恩重難報経』には、人々に両親の恩の重さと速やかに親孝行することの大切さを伝えるという、深い洞察が込められており、台湾各地での上演だけでなく、海外で暮らす多くの慈済人にも現地で演じるようにと促した。

二〇〇三年はイラク戦争及びサーズ感染症に伴って、慈済は再び仏教経典『薬師如来十二大願』を題材とした公演を行い、続いて翌年のスマトラ島沖大地震の後には『仏門大孝地蔵経』、二〇〇七年には『清らかさ・大愛・無量義』等の音楽手語劇を公演した。二〇一一年の経蔵劇『法は水の如く蒼生を潤す・環境保全を進めて人文を弘める』になると、素人である数千人の慈済ボランティアにプロのパフォーマンス集団が協力したことで、全体の規模と芸術の質は過去に勝るものとなった。

ベテラン舞台俳優の曽志遠（ヅン・ヅーユェン）さんは、「音楽劇とは、歌唱と演技、舞台設計、照明、ダンスが結び付いた総合的な芸術です」と言ったことがある。そしてそれらは確実に慈済が経蔵劇を演じる重要な要素となっている。

頌偈（じゅげ）と慈済手語と歌唱を結合した音楽劇は、やがて伝統舞踊、楽曲、太鼓、照明、マルチメディアを駆使したハイクオリティーな舞台美術を取り入れるようになった。元々演技の素人である慈済ボランティアの動作からなるパフォーマンスに、プロ集団の演奏や伝統歌劇が加わったことで、慈済は、経蔵劇という独特の仏法解説と歴史叙述の形式を作り上げた。現代のさまざまな舞台演

出の形式を見回してみても、見かけることはあまりない形だ。元々は観客として鑑賞していた多くの人々がパフォーマーとなり、身をもって仏教経典の世界に足を踏み入れ、経蔵を表現しているのである。

プロと素人が仏法によって出会った

西洋ミュージカルは「写実性」に長けている。有名な『ミス・サイゴン』のように序幕からヘリコプターが舞台に持ち込まれたり、『オペラ座の怪人』では天井から大型シャンデリアが落下したりするが、それに対して中国の伝統的な演劇は比較的「写意性」を重視し、大道具を駆使することは滅多にない。舞台の上でよく見かけるのは「机一つと椅子二脚」だけで、乗馬を象徴する「馬の鞭」や車両を意味する「車旗」のように、極めてシンプルな道具で何千もの山や川といった情景と登場人物それぞれの心境を表しているのである。

慈済の経蔵劇「無量義・法髄頌」は、台湾の人間国宝的存在である唐美雲（タン・メイユン）さんの台湾オペラ歌

有名な川劇「変面」の離れ業は、慈済の経蔵劇では人心の五毒「貪、憤、痴、慢、疑」を表した。（撮影・黄筱哲）

劇団と、国際的に有名な太鼓集団の優人神鼓を招き、仏教の真理と、慈済の実在人物や実話や現代人が直面している課題を結び付ける内容を表現した。

伝統演劇が得意な唐さんの台湾オペラ団メンバーは、道具で舞台演劇を組み合わせる方法によって、「ブッタの一生」、「悟りの道」等の場面を演じると共に、慈済人が経典を以て道としてきた実話を演じた。また優人神鼓のメンバーは、日頃の禅修の体験を動作に取り入れ、細かく説明できない抽象的な心境を舞台上に現した。

慈済の経蔵劇が他の宗教芸術パフォーマンスと異なる点は、毎回数百数千人の「演技は素人のボランティア」が参加していることである。彼らは寄付をしている会員だったり、コミュニティの住民または慈済ボランティアであったりするが、若者から九十歳代の年配者までが出演者となるだけでなく、早い段階からコミュニティの勉強会に参加して経典の内容を理解し、菜食をして斎戒し、敬虔な身心でもってこの大法会に共に臨んでいるのである。

「法海エリアの師兄や師姐の動作は、私の心を最も揺さぶりました。私たち劇団が担っているシーン全てが、より正確で且つ感動的な表現になりました」。歌劇団のメンバーは毎回ボランティアの整然とした動作が慈済の実話とピッタリ合っているのを目の当たりにして感動していたと、唐さんは語った。

『静思法髄妙蓮華』、『無量義・法髄頌』を合わせて計二十六回に及ぶ公演を予定した大規模な経蔵劇は、二〇二二年十二月の高雄を皮切りに、今年七月の彰化公演、そして十月の台北アリーナ公演に至るまで、北部、中部、南部、東部及び海外の多くの国へと、大愛テレビがライブ配信をしたので、みんながオンラインで繋がることができた。仏教ないし宗教界の舞台パフォーマンス史上でも珍しい出来事だと言えよう。

「私たちはこの経蔵劇を、宗教を問わず全ての人を結び付ける『大法会』と位置付け、広く各道場や教派の人々を鑑賞に招きました。それで、伝統的な仏教の法会の形式と異なったものになりました…」。花蓮静思精舎の徳傅（ド・フー）師父（スーフ）は、慈済大学一般教養課程で兼任講師をしている助教授だが、十数年前既に論文で次のように説明していた。「慈済が経蔵劇を演じることで行った『法会』は、『仏法』による『出会い』だと解釈できます」。

経蔵劇を演じることは即ち無量義を深く理解すること

『法華経・方便品』の経文に、「かくの如き諸々の妙音ことごとくを持って供養とし、或いは歓喜の心を以て歌唄して仏徳を頌し、乃至一小音をもってせしも、皆已に仏道を成じき」（新釈法華三部経2より）と書かれてある。舞台芸術を通して仏法を演じることは、敬虔な供養の表現とみなすことができるだけでなく、優美で荘厳なメロディーは仏典の中の偈を記憶させるのにも役立ち、次の世代へと歌い継ぐことができる。

證厳法師は、慈済の経蔵劇の目的とは社会教育にあるため、舞台では「経蔵を理解して実践する」気持ちで演じる必要があると開示した。

「経文を簡潔な文字に編集し、

双和静思堂の模擬舞台で、ボランティアは様々な方法で複雑な目印を脳裏に焼きつけ、素早く定位置につけるようにした（写真左）。数カ月間の辛い訓練を通して整然とした隊形が出来上がった（写真右）。
（撮影・蘇峻民）

音楽のメロディーに合わせ、誰もが口ずさむようになれば、覚えやすくなります。また、舞台劇の方法であれば、大衆に喜んで仏法を受け入れてもらうことができます。これも慈済独特の弘法方法です。宗教、言語の制限を突破することができ、大衆に仏法の真善美を体験してもらうことができるのです」。

慈済の経蔵劇は、世代を超えて歌い継がれることを期待し、仏法の日常化や菩薩の人間（じんかん）化を唱えた「人間仏教」の道理を、より多くの人に理解してもらうと同時に、仏法が日常生活に根付くことが、まさしく法師と全ての慈済人の心からの願いであることを象徴している。（慈済月刊六八四期より）

経蔵劇『無量義・法髄頌』の舞台で、唐美雲台湾オペラ団がプロの所作によって現したのは、シッダールタが王宮を出て、生老病死を目の当たりにして衝撃を受け、それにより一切を放棄することを決意し、解脱の道を求めたくだり。何列ものボランティアも、全身の動作でその心境を譬え、雰囲気を盛り上げた。（撮影・黄筱哲）

【證厳法師のお諭し】

親心と菩薩心

◎訳・慈願　絵・陳九熹

「いたわり」とは、子供が転んだ時、親が抱き起して撫で慰めるようなことです。いつまでもこの親心を保ち、菩薩心で以て地域コミュニティを愛護し、必要とされたなら、どこであろうと直ちに駆けつけるのです。

歳末までにはまだ一月余りありますが、年に一度の歳末祝福会と認証授与式はもう始まっています。私が例年より早めに出かけたのは、慈済人がとても精進していて、人間（じんかん）に善の種子を蒔いているからです。発心立願する人は非常に多く、慈済の善行は多岐にわたり、関心を寄せなければならない世の出来事も多くなっていますから、多くの時間を費やさなければなりません。

彰化から始まった経蔵劇の公演は、雲林、嘉義、台南、高雄、屏東へと続き、どの舞台もボランティアが雲集のように集り、荘厳で道気に満ちていました。皆さんは発心立願して少しずつ結集し、私に大きな確信と力を与えてくれました。認証を授かる前は、多くの人は会員になってから慈済に参加し始め、長い時間をかけて理解し、心から敬服してから、養成講座を受けようと決心するのです。そして、何年かしてから、慈済に対する信心が堅固なものとなり、認証を受けようと思うようになります。私は皆さんに大きな期待を持つと共に、最大限に祝福します。「仏教の為、衆生

の為」は、自分に対して責任を持ち、家庭が円満になり、さらに隣人や地域社会の人々を導いてください。

どの会所でも、慈済青年ボランティアの卒業生たちに出会います。以前は学業や仕事で故郷を離れていても、その縁は残っており、それが成就し、養成講座を経て、認証を授かる時、私に「あなたの子が帰ってきました」と言います。これは私と彼らの合言葉です。本当に心が通い合っているのです。彼らは責任を担う準備ができており、人生の価値がまた一段と上がりました。

今回の行脚では感慨深いことが多々ありました。特に自分が老いて、過去を振り返ると、感謝の心が尽きません。どこに行っても、視線はいつも古参ボランティアに向いてしまいます。また、来ていない人の事を尋ねると、もう高齢で出かけるのが不自由になられましたという返事が返ってきます。もう会えない人もいます。全ては自然の法則ですが、記憶の中には彼らは永遠に存在しています。

私はただ一つ発願し、心を尽くしているだけで、本当に志業に投入して進行させてくれたのは、古参ボランティアたちなのです。私の法を心に聞き入れ、私の歩みに歩調を合わせてついて来てくれました。人が多く集まれば、大きな力となり、心強いばかりです。三、四十年を経て、彼らは年齢を重ねても、心はしっかりと私と共にありました。そして四大志業に参与し、全身全霊で見返りを求めず世に奉仕し、やり遂げた喜びを感じ、人生に価値を見出した故に、絶えず感謝の気持ちを持っているのです。

誰もが自分の健康に注意し、それ以上に、時を無駄に過ごさないことを願っています。以前に受けた恩と情を思い出し、または怨みに思うことがあったとしても、不愉快な煩悩は取り除かなければなりません。心を浄化し、改めて人情のある人間関係を立ち上げてください。記憶を眠らせず、すぐに自分を啓発して、堅い意志が立ち止まらないようにしましょう。さらに仏教を若い世代に合わせて伝えていくことも必要です。慈済が以前どのようにして進んで来たのかを知らない若者がいれば話して聞かせ、腰を低くして伝承し、身を以て担うのです。

毎日次から次へと菩薩の皆さんから、見たり聴いたりした話を聞かせてくれると、私は心から喜びを感じて満足し

ます。仏法を人間（じんかん）や家庭に取り入れているからです。過去に間違いを犯した人や家庭が和やかでなかった人が、慈済に入ってからは心と力をもって奉仕し、法喜に満ちています。戒を護って正道を歩み、身も心も清らかにして自分を改め、現在は夫婦が心を一つに、家族全員で慈済人になっています。家庭の雰囲気が和やかであることは、誰もが求める幸せですが、皆が共に福を造り、社会が安定してこそ、事業も安定するのです。

屏東のボランティアから、九月に明揚国際科技公司の工場が爆発を起こした際の支援についてのお話を聴きました。巨大な爆発音とともに、舞い上がる濃煙を見た慈済人の脳裏に浮かんだのは、直ちに行動することでした。十八日間、現場で作業にあたった救助隊員を支援し、外から見守る家族に付き添いました。それは、まるで転んだ子供に思わず駆け寄って慰める親心のようなものだと言えます。いつまでもそのような親心と菩薩心で地域コミュニティを愛護し、必要があれば、たとえどこであっても駆けつけなければなりません。

歳末祝福会では必ず、慈済の大蔵経を放映し、年の始めから毎月、慈済がどんな活動をしてきたのかを報告しています。台湾を護る以外に、世界にも踏み出し、毎年、支援地域は増加の一途をたどり、今月の統計では既に百三十三の国と地域に及んでいます。慈済は僅か数人から始まり、今では長い隊列ができています。そして、初代から二代目、三代目へと引き継がれ、小さい子供でさえ、竹筒を持って人助けをしています。それは、祖父母や両親が育んだ慈悲心なのです。僅かだと軽んじてはなりません、私たちの力は「蛍」の淡い光であっても、群れを成せば明るくなり、この世を護ることができるのです。

皆さんは私との縁を大切にして、最後の一息まで志業を続けると発願してくれました。私も最後の一息まで説法し続けると発願します。今の体では力を込めて息を吸ったり行動しなければならず、一歩一歩注意深く歩んでいますが、願いは慈済菩薩道の心願が皆さんの心に固く焼き付いて、片時も忘れることなく「私には信心があり、願があり、力があります」と念じるようになる事です。貴い命のいつ如何なる時でも価値のあるものでありますように、皆さんの精進を願っております。

（慈済月刊六八五期より）

「手袋型」の食器洗いスポンジ 公私混同しない

文、撮影・釋德澡　訳・心嫈

手袋に食器洗いスポンジを縫い付け、食堂テーブル用の布巾を色で分けて、「公私混同しない」方法を取っています。他人の健康を守るという思いやりから考え出されましたが、同時に自分自身をも護ることができます。

「静思精舎の食器洗いスポンジはとてもユニークですよ！」と共用の食器洗いを手伝っているボランティアが褒め続けました。

五年余り前、私は自分の仕事以外に、交代で副執事としての仕事も務めるようになりました。担当範囲は、精舎で朝食の給仕や三食後に残ったおかずの回収、お皿の食べ残しの処理、テーブル拭き、炊飯器洗い、共用の大皿と個人の食器洗い及び紫外線によるエコ食器の消毒などです。

初めて「手袋型」の食器洗いスポンジを見た時は、こんなものがあるのだと驚きましたが、毎日使っているととても使い勝手がよく、ごく当たり前のものとして使うようになりました。でも数日前にボランティアからこの「手袋型」の食器洗いスポンジの良さを聞くと、その根源を究明しようと思いつきました。

「とてもユニーク」ですが、その特徴はどこにあるでしょうか？形は手袋ですが、水を通す穴が開いた材質の布でできています。両手を長時間、洗剤に浸けずに済み、手のひらと親指のところに、食器洗い布を縫い付けてあるので、使いやすくて効率的なのです。

調べてみると、それができた背後には感動的ないきさつがあることが分かりました。

「数えてみると、既に二十三年経っているのです」。裁縫をしていた常住ボランティアの胡淑照（フゥ・スゥヅァオ）さんによると、当初共用の食器を洗うスポンジは、個人用の食器を洗うものと全く同じだったので、よく取り違えて使われ、仕舞にはどこかへ行ってしまうのです。精舎では食事の時に、取り分け専用の箸とスプーンを使っており、もし、食器を洗う時に、スポンジを混同して使えば、衛生上の問題が心配されます。そこで、「公衆衛生に配慮し、公私の区別をはっきりさせるためにと考えられたのが、このアイデアとデザインでした」。

●静思精舎の食堂では、食事の後で共用の食器と私用の食器を分け、４つの手順で洗浄する。常住師父とボランティアは手袋型スポンジを使って共用の食器を洗う。思いやりのある設計により、洗浄がスムーズになりスピードアップした。（撮影・梁嬌親）

胡さんによると、「この食器洗い手袋は、元は楕円形の手のひらの形でしかなく、親指のところが単独に動かせるようになっていなかったため、素早く食器を洗うことができませんでした。精舎では毎日、延べ千五百人余りが食事をしますから、食器洗いの効率がとても重要でした。そこで親指の部分を独立させたデザインになったのです」。

当初は親指のところにスポンジ布は縫い付けてありませんでしたが、皿の縁がしっかり洗えていないことに気づき、それを補完したのです。一方、手のひら部分の布地が磨耗し易かったため、異なった材質の布にしました。発想から完成品ができるまで、師父たちに使い心地とアドバイスを伺い、何度も改良しました。今では共用の食器洗い専用のスポンジは一目で分かるようになっていると同時に、「とてもユニーク」、「使い勝手がよい」、「実にクリエーティブ」などとよく褒め称えられます。

コロナ禍の前、精舎の食堂のテーブルは全て、同じ色の布巾で拭かれていました。しかし、この三年間、常住師父たちは、目に見えず、触っても分からないウイルスに対処するために方法を考えました。そこで、異なる二色の布巾を使い分けて、ターンテーブルと個人の食器を置く箇所を分けて拭くようにしたのです。しかしそのために、仕事の時間が長引いてしまいました。

もちろん最初は慣れませんでしたが、皆でそれに慣れるように努力し、大変な時期を乗り越えると、今では「公私を分ける」ことで安心できる衛生習慣が身に付いたのです。そのことで、證厳法師が講釈した『法華経・信解品』の中の、皆に念を押した言葉を思い出しました。「心に起きた一念や考えは、完全に善となっているでしょうか？衆生を利するものとなっているでしょうか？善の心、衆生を利する心はしっかり守らなければなりません」。

良い習慣を保ち続けることは、自分を守るだけでなく、精舎で食事するあらゆる人を守り、自利利他となるのです。善の考えが途絶えることがなければ、それが自分も人をも守る、最良の「お守り」になるのです。

（慈済月刊六八二期より）

文・王偉齢（《アメリカ慈済世界》隔月刊誌編集長）
写真提供・ポーランド慈済ボランティア
和訳・御山凛

ロシア・ウクライナ戦争から避難してきた高齢者

ワレニキクラブ運営中

「ポーランド人の家庭が私を受け入れて喜んでいるかどうか、また、迷惑をかけているのではないか、と心配しています……」。晩年になって戦火を逃れ、居候の身となっている日々は落ち着かない。ロシア・ウクライナ戦争が終わるまで、ウクライナ餃子のワレニキを包もう！一口一口がふるさとの味で、甘酸っぱく、暖かい……。

ポーランド・ワルシャワ。ある住宅のキッチンでは、コンロの上に砂糖を加えた大粒のサワーチェリーが煮込まれ、綺麗な赤紫色のジャムに仕上がっていた。窓の外の日光が、ちょうど室内に舞い上がった小麦粉に反射して、空気中に煌めく金の砂のように見えた。笑い声と共に、部屋中に甘酸っぱい、温かみのある香りが広がった。

ロシア・ウクライナ戦争が勃発してからワルシャワへ逃れてきた十数人のウクライナ人高齢者たちが、慈済ワルシャワ連絡所の木製長テーブルを囲むようにして座り、シワだらけの手で、発酵させたパン生地を器用に小さく分割し、麺棒で丸く薄い皮に伸ばしていた。チェリージャムが冷めるのを待ちながら、各自がそれぞれ家伝のウクライナ餃子（ワレニキ）のレシピをシェアしていた。

「お年寄りたちはワレニキクラブに来ると、まるで幼稚園の子供のように、家伝のワレニキレシピで誰が一番かを比べるのです！このように、苦難を忘れてかくしゃくとなってくれるなど、私が最初にこの企画案を出した時には、想像もしていなかった収穫です」。ハンナ・マンクスさんを含むウクライナ籍慈済ボランティアは、高齢者たちと一緒に餡と故郷

を想う心をワレニキの皮に包み、中身がいっぱい詰まった円形または半月形のワレニキを鍋に入れるのを待っていた。

ボランティアは、この高齢者たちの言葉には疑う余地のない誇りがあることを知っている。それは各地を四百日余りさまよった果てに心の拠り所を見つけた証しなのだ。ワレニキを包むと、戦争前に戻ったかのようだった。孫が甘えて来たらキッチンに入って全力投球し、主食系やスイーツ系のワレニキを作っていた頃と同じように、永遠に変わらない家庭の時間を思い出しているのだ。

「戦争が勃発すると、お年寄りの置かれる状況は往々にして最も困難なものになります。彼らには言葉の問題がありますが、よく病気に見舞われるからです」。ハンナさんは、高齢の体で異国に逃れなければならなかったおじいさんやおばあさんたちを思うと、とても心が痛んだ。「ウクライナでは医者にかかるのは簡単で、電話をかけて予約すれば、翌日には

●慈済がワルシャワで主催した「ワレニキクラブ」。被災者雇用制度で女性とお年寄りたちが異郷の生活に溶け込めるよう手助けしている。

先生に診てもらえます。しかしここでは、半年から一年かけて順番を待ってから、やっと必要な科の医者に予約が取れて診てもらえるのです。また、彼らは医療スタッフとどうやってコミュニケーションを取れば良いのか分かりません。それに、事務作業もできず、体も丈夫ではありませんから、彼らを雇いたいと言う人もいません。バス停に書かれた文字が読めないことで出かける時に感じる不便さと言ったら、お年寄りはもちろんのこと、私でさえも、自分は火星から来たのではないかと感じるほどです……」。

ポーランドに長く留まる以外にはないが、全てがこのように馴染みなく、一から模索する必要があるため、お年寄りたちは次第に、ホームステイ先の部屋からも出られなくなってしまった。

「ポーランド人家庭が私を受け入れて喜んでいるのかどうか分かりませんし、迷惑をかけているのではないかと心配しています……」。ウクライナ人のお年寄り、ニナ・クラフチェンコさんは、「いつか彼らに出ていくよう言われる日がくるかもしれないと思うと、怖いのです……」と心配を打ち明けてくれた。

長い間、恐怖や不安、そして孤独な状況に置かれ、シニア難民とも言える彼らは、日増しに元気をなくしていった。

二〇二二年九月末、ボランティアは「ワレニキクラブ」を立ち上げる案を出した。毎週金曜日にお年寄りたちを慈済ワルシャワ連絡所に招き、ワレニキを作ってもらうのだ。それはやがて、慈済が現地で推進する中長期ケアの一環となった。

「ウクライナ人は生まれつきワレニキが作れるのです！ただ、問題は、お年寄りたちが出て来て、参加してくれるかどうかでした。初め、他の人は無理だと

●ワレニキクラブでは全て菜食を作っている。キャベツの塩味ワレニキに玉ねぎソースやヨーグルトをかけるのが本場の食べ方だ。

思っていたようですが、私は深く考えることなく、ボランティアに呼びかけて食材の購入と準備をしてもらい、彼らを招待しました。最初は七人のお年寄りだけでしたが、今年六月までで三十回以上続けて行っており、十六人のお年寄りが決まって参加してくれています。彼らワレニキメンバーはダンプリングイストというニックネームで呼ばれ、毎週金曜日の集いを楽しみにしていて、だんだんと互いに誘い合って公園で話をしたり、散歩したりするようになりました」。

ふるさとの味のワレニキ作りは、お年寄りたちに、外部と接触する勇気と自信を与えた。できたワレニキの八割はチャリティーバザーに出品するが、慈済連絡所のポーランド人ボランティアが食材の購入とウェブサイトでの宣伝を受け持っている。「キャベツ味にチーズフライ、オニオン・マッシュルームフライまたはマッシュポテトなどのフィリングがあります。フルーツジャム味もあり、サワーチェリーはここにしかありません！ポーランド人も食べたことがなく、思わず息を呑むほど美味しかったので、いつも買いに来てくれるのです。チャリティーバザーで得たお金は、お年寄りたちに分け与えています。あまり多くはありませんが、おじいちゃん、おばあちゃんたちは自分の手でお金を稼いでいることに、とても達成感を感じているのです！」

そして、二割のワレニキは慈済の長期ケア世帯に寄付される。彼らは仕事ができないため、家計が厳しく、ふるさとの味のワレニキを一袋買うぜいたくさえ負担できないのだ。「ケア先の家庭に届ける時は、いつも写真を撮ります。戻って来るとワレニキメンバーに見せ、彼らが遭遇した状況を話して聞かせます。おじいちゃん、おばあちゃんたちは、自分たちの存在はまだまだ重要で、他人に幾らかでも喜びをもたらしていることを知って、とても喜んでいます」。

百四十万人の避難民

「当時、私は息子を連れて汽車に乗りましたが、その車両には十八人が詰め込まれ、立っている人も座っている人もいました。途中、ロシア軍が今まさに爆撃している区域を通った時、空は真っ赤に染まりました。私たちは怖くて外に逃げ

出したかったのですが、どこへ逃げれば良いのか分からず、頭を抱えて、無事を祈ることしかできませんでした」。以前、英語の教師であったハンナさんは、ウクライナ東部のザポリージャからパニック状態で避難した。ワルシャワに到着してからは、慈済が英語を話せるウクライナ人を通訳として探していると聞き、慈済の現地での被災者雇用制度のボランティアとなった。

この一年間、彼女は英語クラスの開設を手伝い、より多くの英語が話せるウクライナ人ボランティアが、慈済の中長期支援に加われるようにと養成の手伝いをしてきた。「最初、この戦争は数週間続くだけで、直ぐ家に帰れると思っていたのですが、そうではありませんでした。慈済の被災者雇用制度にはとても感謝しています。私にポーランドに住み続ける力をくれました！」。

もちろん、全ての人が仕事を見つけられるわけではないが、ポーランド政府の今年三月の統計によると、約百四十万人のウクライナ難民がポーランド国内に留

●ハンナさんは今年二月初め、故郷のウクライナ・ザポリージャに帰った。街はガラガラで、建物の窓ガラスが無く、木の板が打ち付けられて塞がれていた。（写真提供・ハンナ・マーカス）

まり続けると決心しているそうだ。またノルウェー難民理事会の調査で、七割以上の異国に放浪しているウクライナ人の多くは、子供を連れて避難した女性たちで、貧困ラインギリギリに陥り、最低の生活さえも維持するのが難しくなっていることが分かった。

「条件が良く、専門性があり、リソースがあれば、国際化した大都市や西ヨーロッパへ行って生計を立てることができます。それができない人は、多くがルブリンに留まっています。なぜなら、ルブリンは辺境にある二級都市なので、物価が比較的安いからです」。何度もルブリンに赴いて難民ケアをしているドイツ慈済ボランティアの陳樹微（チェン・スゥウェイ）さんは、多くのNPO団体が撤退していることと合わせ、今年は物資や水道、電気が値上がりし、ポーランド政府の力だけでは足りなくなっている、と説明した。

「戦争は軍事に関係のない庶民にとっては非常に残忍な仕打ちです。私たちがサポートに赴くのは、人々に憎悪心が芽生えないようになることを願い、戦争の残忍さだけに追われているのではなく、彼らに関心を寄せる人もいることを知って欲しいと伝えたいからなのです」。

●慈済のワルシャワでの難民ケア活動の様子。ハンナさん（左2人目）は通訳として慈済ボランティアと肩を並べて同郷のウクライナ人をサポートしている。（写真提供・周如意）

故郷を離れてから四百日余りの想い

開戦から一年が経った時、ハンナさんはザポリージャに帰った。ロシア軍によって猛烈に爆撃されたマリウポリとドネツクからは遠くないため、住民がここに避難して来ていた。再び故郷の街道に足を踏み入れたと言うのに、ハンナさんは、思っていたほど心が高ぶら

なかった。むしろ気持ちが混乱したそうだ。「全てに馴染みがなくなったのです。あらゆる建物は窓がなくなり、空気は戦争の匂いがしていました…昼間でしたが、街には歩いている人の姿はなく、子供たちも外で遊んでいませんでした。私が住んでいた家には他の都市から来た避難民が仮住まいし、家具の配置も変わっていました。もちろん、私は反対しませんでした」。

たった数日間滞在しただけで、ハンナさんはポーランドに戻った。彼女は、子供の安全と教育のために、ワルシャワに残ることを決めた。いつも笑顔の彼女だが、ウクライナの何が一番恋しいかと聞かれると、少し考えてやっと、そして真剣な面持ちで、「最も恋しいのは実は、毎朝起きてから冷蔵庫のところに行き、開けて中に何があるのかを見て、どんな朝食を作ろうかなあと考える時間です。本当のところ、自分の作る目玉焼きが、私はとても恋しいのです」。

ハンナさんとお子さんは今、慈済と協力しているカトリック教修道院で暮らしており、三食は修道院が提供している。彼女は施設が惜しみなく助けてくれることに感謝しているが、以前の自立した時間に想いを馳せずにはいられない。「もし私の同胞に何かを言うならば、この戦争は、みんなをより良くし、悪くなることはないのだと言いたいです」。

慈済がワルシャワでケアしている世帯とお年寄りたちは皆、ボランティアと一緒に慈善活動をしている。例えば、焼いたドライ・フルーツを物資が不足しているウクライナの戦地に届け、避難できない高齢者や女性、子供たちに提供している。「ウクライナの誰もが知っているアニメに、『あなたの船がどう航行するかは、この船をどう名付けるかで決まる』という言葉がありました」。ハンナさんは、「だから私は難民ではなく、ボランティアなのです」と言った。

お湯が沸き、鍋の中のワレニキも茹で上がり、ボランティアがすくい出すと、ウクライナ人のおばあちゃんたちが引き継いで、全てのワレニキにバターを塗ったり、カリカリに炒めた香ばしい玉ねぎを載せたり、ヨーグルトを用意したりした。本場のワレニキはこのようにして食べるのである。人々はポーランドに出現したこの一皿のワレニキという故郷の味を、楽しく味わおうとしていた。一人ひとりが思いに耽り、栄養をつけては頑張り続けていくことだろう。（「隔月刊誌「アメリカ慈済世界」より）（慈済月刊六八一期より）

インドの旅

喜びも悲しみも書き尽くせない

文・朱秀蓮（台北慈済ボランティア）
撮影・葉晋宏（基隆慈済ボランティア）
訳・李曉萍（明湉）

無邪気で可愛い子供たちが私たちを追いかけて来た。自分の手のひらをあごに当てて花のようなジェスチャーをした。私たちは嬉しくなっただけでなく、苦しみを甘んじて受け入れ、頑張って大愛村と学校を建設し、彼らが代々続いた貧困から抜け出すことを願っている。

六月下旬、台湾からインドのブッダガヤに到着した翌日、私はバクラウル・コロニーで行われた衛生教育宣伝講座で、加圧マスクを着用し、姉に抱きかかえられたローシュニを見た。ハッと気がついて、スマホのカメラボタンを押した後、耐えられず、もう一度振り返って見た。

その後、何度かコロニーを訪れたが、その度に火傷を負ったその二歳の女の子を見かけた。インドの貧しい村はよく火事になるが、主な原因は、わらで家を建てていることにある。ボランティアは両親を説得して、彼女を医者に連れて行った後、ローシュニの口を閉じるための手術を受けさせた。慈済ボランティアを乗せた三輪タクシーが村に入ってくると、彼女の父親のアクレシュさんはいつも熱心に挨拶に来て、道案内をしたり、物資を運んだりするだけでなく、リサイクル活動まで学んだ。

アクレシュさんの家は、この路地の典型的なモデルである。竹垣とコブ土壁の家で、ドアの前にある二つのかまどの横にはアルミ鍋と乾燥した牛糞燃料が置かれてあった。家の軒は低く、ベッドと椅

子は木とロープで編まれていて、座ってみると、クッションが良かった。それ以外は、余分なテーブルや椅子、タンスなどはなく、服はロープに吊るされていて、それが全財産である。

村の他の家も大半がレンガの壁などなく、竹とわらに泥を塗ってある。彼の家は、屋根がプラスチック製キャンバスで覆われているので、他の家に比べると立派だと言える。給水ポンプは数世帯で共有し、給水ポンプの横に、某年某月にどこそこの外国の団体によって寄贈されたもの、と書かれた小さな石板が立っている。現地の給水ポンプは、スイッチを入れても直ぐに水が出るわけではなく、一日に二回、一時間ずつしか給水しない地

●どんな環境にいても、「幸せな顔」のジェスチャーは、大人も子供も笑顔にさせる。

域もあり、給水ポンプを何度押しても水が出ないこともある。

村には電気も通っているが、軒や家の中に九〜十五ワットの電球が一、二個ぶら下がっているだけで、その光は弱く、遠い星のように見えるが、実はこの世なのである。

希望プロジェクトの難しさ

六月から七月にかけて、ボランティアたちはほぼ毎日村を訪れたが、現地ではトイレを見かけなかった。シロウンジャ村で健康診断と調査を行った時、ある家で清潔なトイレがあるのを見たが、扉はなかった。田舎で家庭訪問する時、トイレに行くのが不便なので、外出する時は何時間であっても、皆我慢した。幸いなことに、天気が暑かったため、水分は全て汗になり、青いTシャツとバックパックには白い汗の結晶模様が残った。

ブッダガヤはお釈迦様が悟りを開いた地である。苦行林遺跡を訪ねた日の早朝、珍しく給水ポンプ脇で歯磨きをしている人を見かけた。ほとんどの場合彼らは、《薬師経》に書いてある「朝は木を咀嚼し、顔を洗って口をすすぐ」ようにして、枝を手に持って口の中で噛んで、歯をきれいにするのだ。資料を調べてみると、地元の人はインドセンダンの枝を使っていることが分かった。ある日、市場で「竹筒貯金」の話をした時、勇気を出して店主にその木の枝を一本分けてもらった。口に含むと苦味があり、噛んだ後は甘みに変わった。

他の地方の慈済ボランティアは、無邪気で可愛い子供たちが追いかけて来て、「쎄쎄 쎄쎄！」（ヒンディー語で「幸せな喜び」を意味するクシュと同じ発音）と叫びながら、あごに手のひらを当てて自分に花のポーズをして見せるという機会には、なかなか恵まれないだろう。この地でボランティアが教えた、「幸せな顔」のジェスチャーが既に、暗黙の了解となっているのだ。

シンガポールとマレーシアのボランティアチームがブッダガヤに来て六カ月目になる。「お釈迦様の故郷を覆す」のは、確かに困難に満ちた「希望プロジェクト」である。心に誓ってここに来た人は皆、一日を二日として使い、慈善、医療、教育、人文を推し進めるために、毎日村でなけ

れば市場にいて、村人たちに「五十銭の力」を伝えている。彼らの忍耐力には、感服するばかりだ。「これは上人が望むことですから、弟子として必ず使命を達成したい！」と、この「一大事因縁」を把握するために、全員が同じように答えた！

シンガポールとマレーシアのボランティアは、自分たちの国と比べ、穴だらけの道、騒々しさ、人畜同居の生活、ゴミが散乱した環境に、悲惨な国情が表れていると言う。ボランティアたちは自ら困難を体験し、苦労を修行とみなしていているため、疲れたと叫ぶ人はいない。

台湾の人文記録ボランティアの第一陣として、私たちはボランティアチームの足跡を残せるよう努めた。しかし、どうしたら書き尽くせるだろうか？

神の子を憐れむ

三十日以上頑張ってきたが、いよいよお別れしなければならない時が来た。コルカタ空港で乗り継ぎ便を待っていた時、多くの美しく着飾ったインド人旅行者が行き来する様子を眺めていた。或る双子の息子を連れた夫婦は、大小のスーツケースでいっぱいになったカートを押していたが、大きな段ボール箱の梱包テープを剥がして、真新しいおもちゃの車を一式取り出して子供に与えた。子供はそれを強く抱きしめた。

その時、パトナ市でのことが思い出されずにはいられなかった。サンジェイ・クマール医師の病院で、火傷を負ったミスンとラジョに会った。二人の子供は、慈済ボランティアが手伝って、手術を受けた。ミスンは、二年前に木に登って遊んでいた時、誤って感電し、頭皮が損傷を受けて、両足は火傷したため、学校

●シロンガ村とバクラウル村の村民がボランティアの列に加わった。朱秀蓮さん（右）は、より多くの人にブッダガヤの感動を見てもらえるよう、インタビューし、記録した。

を中退した。ラジョはストーブから出た火花が服に引火し、顔面に火傷を負い、左手指をひどく湾曲してしまった。同じ国の子どもたちでも、貧富の差は大きく、安全や健康に関する教育の欠如により、子どもたちは心身に苦しみを抱えるようになる。

七月末に出発する前、次回来る時に使えるかどうかわからないので、数ルピーを残すだけでいい、と誰かが提案した。紙幣に描かれたマハトマ・ガンジーの肖像を見ていると、人々に「貧困は最悪の暴力である」と訴えているようだった。このインド建国の父は、「神の子」と呼ばれる社会の底辺にいる人々のために、権利を勝ち取ろうと努力したが、七十年以上経った今でも、インドの人口のほぼ半数は、依然として貧困線以下にいる。

台北に戻った私は、使い慣れたベッドでリラックスして眠りに落ちた。窓から朝日が差し込んで目を開けると、先ほど見た夢の中の光景を思い出した。単語を探しながら、片言の英語でインタビューした時の光景だ。子供の顔、あの場所の匂い……。私は帰って来たが、心はまだ三千七百キロメートル以上離れたブッダガヤにあった。（慈済月刊六八二期より）

命の贈り物

阿毛と私

◎口述・邱建銘（台中慈済病院直腸外科主任）
整理・劉萃芬（台南慈済ボランティア）
絵・林順雄　訳・江愛寶

病状が悪化したことを知ってから、
心が折れて悲しむのは人の常である。しかし、だからと言って、
早く知らされずに楽しく暮せばいいものだろうか？
私は平常心だと思う。
平常心とは、どうでもいいというのではなく、
普段から絶えず気に掛けてこそ、
平然として無常に向き合えるのだ。

我が家の「阿毛」とは、十歳のマルチーズのことである。先月から、咳が出てゼーゼーという音がしていたので、しばらく様子を見てから、動物病院へ診察に連れて行った。初めは風邪薬を処方してもらったが、症状は改善しなかった。二回目に行った時、レントゲン写

真を撮ったところ、右上の肺葉が全部真っ白になっているのが発見された。そして、エコーで検査したところ、肺に腫瘍らしきものが見つかった。獣医は、悪性腫瘍の確率が高いと判断した。

それを聞いてとてもショックだった。普通、犬を飼っている場合、飼い主が犬の最期まで付き添うのが殆どで、老いた犬が私たちを見とることはない。小型犬の平均寿命は十数年だから、私たちが最初に阿毛を飼い始めた時から心の準備はできていたはずだった。しかし、いよいよその時が来ると、やはりとても悲しくなった。

私と妻は阿毛のために涙を流した。息子は兵役に行っていたが、帰って来ると、阿毛の目をじっと見て、涙を流し続けた。阿毛は何がなんだか分からなかったかもしれない。「私はもうすぐ死ぬ犬だと言うのに、あなた方は私を慰めないばかりか、逆に私に慰めてもらいたいというのか？」。そう言いたげだった。

一家全員、何日も続けてよく眠れず、昼間は元気がなかった。思い起こしてみれば、まだレントゲン写真を撮っていなかった頃は、皆が病状を知らなかったため、毎日楽しく過ごしていたのだ。病気を知ってからと言うもの、どうしてこんなにも悲しいのだろうか？

自分でよく考えてみた。私たちが普段患者に病状を説明する時、病状がこれほど重いことを早く患者と家族に知らせて、最悪の事態に備えるべきなのだろうか？それとも、知らせずに、楽しく暮してもらった方がいいのだろうか？

初めは私にも答えはなく、二～三日静かに過ごした。そして、反省してから、こんなことをしていてはだめだと気づいた。

よく考えてみると、阿毛と私たちが暮らしたこの数年間、私たちは阿毛に申し訳ないことでもしただろうか？以前、褒めるべきだったのに、褒めなかったとか、叩いたりして虐待したこととかがあっただろうか？それとも、他に何か思い残すことはないだろうか。どう考えても思い当たるふしがない。

だんだん釈然としていった。というのも、私は本当に、阿毛と絶えず良縁を結んできたからだ。妻に私の気持ちの変化を分かち合った。そして、私たちはしばらくこの事を気にかけないようにした。

気にかけず、平常心で過ごした。やるべきことをやり、可愛がることも世話もした。後になって本当に気が付いたのは、無常に出会っても、本当に平常心でいるべきだということだ。平常心とは気にかけないことではなく、絶えず相手に優しくして、悔いのないようにすることである。何事が起きても、平然と生命の法則に向き合うのである。

医師と患者の関係でも同じで、患者や家族に病状を知らせ、その後に、ショックと悲しみをもたらすべきか？一人一人の考え方は違うだろう。私自身の結論は、早めに知らせて、心の準備をさせるのである。早く知れば、あらゆることを大切にし、その後悔を早く改められるからだ。大切なのは、普段から人生の課題をこなし、後悔しないようにすることである。

（二〇二三年五月三日ボランティア朝の会での分かち合いより）
（慈済月刊六八〇期より）

良い縁を結んで、煩悩を断ち切る

自分を利する前に他者を利しましょう。
良い縁を結ばなければ、煩悩は永遠に消えません。

◎文・釋徳仭／訳・済運

戒律を守れば、仏門入りを後悔することはない

九月十五日、受戒する直前の弟子十一名が受戒会場に向かうため挨拶に訪れた時、上人は次のように開示しました。「その場所は懺悔の場とも言います。何故懺悔が必要なのでしょうか。皆さんはいつの世に生まれ変わっても、非常に多くの習気を蓄積し、多くの業を作ってきました。しかし、発心立願して出家してから、自己浄化を始めました。そして、既に仏道を歩む心は揺らぐことがなくなり、受戒に行くことを決意しました。これは出家して仏門に入るという方向を自ら正しいと認識し、永遠に後悔しないことを表しています」。

「受戒するには戒律を守る決意が必要です。出家した当初のように、菩薩道に励む目的は、仏の教えを学んで悟りを開くことです。仏法を学ぶことが私たちの初心であり、修行する時間がその過程です。ですから、受戒したら、永遠に後悔しないことです。仏門に入るなら、戒律を守り、仏法とは何か、何をしたら戒律を犯すのかを理解する必要があります。戒律を守るのですから、仏法に反することはできないはずです。その決意がなくてはなりません」。

「その会場にはあらゆる方面から集まった修行者がおり、各自が修行理念を持っています。静思道場は世間から離れていても、再び世に出て衆生を悟りに導き、他者を利してから自分を利するのです。というのは、この一生で修行が完成するわけではないため、この人生では『人と良い縁を結ぶ』しかなく、同時に煩悩を断つのです。良い縁を結ばなければ、永遠に煩悩を断つことはできません」と上人は指摘しました。

「生まれ変わる中で、私たちは衆生と縁を結んできましたが、良い縁もあれば、悪縁もあります。良い縁を結んだ人たちはその出会いを悦び、悪縁による出会いであれば、人は心に無明が生じ、無明は益々膨れ上がります。この道理を理解すれば、先ず耐えることを学び、他人からもたらされる逆縁に耐えるのです。『縁に従って古い業を消し、新たな苦しみを作るなかれ』と言われます。過去に結んだ悪縁や逆縁に遭遇した時、心をしっかり守って、悪を善に転じさせなければなりません」。

「受戒した後は、正式な出家人となります。私たちには慈済の宗旨と法門があり、自分に対しては世に出ることを課し、人間（じんかん）という実社会に溶け込んで活動するのです」。

先日、精舎の師父と清修士（有髪の出家人）が世界宗教会議での「證厳法師の思想と実践」セミナーに参加するため、アメリカに向かいました。上人は、「清修士が私たちの修行の主旨を説明すると、会場にいた参加者は、慈済が立宗したことと慈済の宗旨に対してとても好感を持ってくれました。これこそが私たちの社会に対する影響だと言えます」と語りました。

また上人は、静思法脈の修行道場は静思精舎にあり、静思家風は「自力更生」である、と言いました。「私たちは世間と争いませんが、慈済宗門は人間（じんかん）に対して開いたものであり、世の出来事に関心を寄せています。『仏教の為、衆生の為』が永遠に私たちの歩む方向であることを忘れてはいけません。即ち、『静思法脈勤行道，慈済宗門人間路』です。静思法脈は仏教の為に法脈を伝承し、慈済は衆生の為に誠意のある奉仕をしている世に溶け込んだ宗門なのです。現代人は教育程度が高く、世の出来事に対してとても多くの知識を持っています。私たちの法門に入り、知識を智慧に変え、自分を守って、衆生を利してもらうのです」。

慈済志業の為に人材を留める

病院と学校の懇親会の会議が九月二十八日に精舎で開かれました。その日は「教師の日」でしたので、教授や教師、医師たちが上人の前で謹んで教師の日を祝いました。「慈済の四大志業はこの数十年来、安定して発展

してきました。医療と教育は初期の頃、大変苦労しましたが、私はその二つの志業でとても良い縁があって恩人に恵まれ、慈済を続けて正しい方向を進むことができました。誰もが心を一つにし、生命を守る医療と慧命に関する教育を行い、台湾でその良能を大いに発揮して模範となることができたことに感謝しています」。

「慈済は教育志業を始めて三十四年になります。慈済看護専門学校は二年制で学生の募集を始め、その後、五年制の看護科と四年制の医療技術科を開設し、数多くの優れた看護人員を育ててきました。花東地方に看護の人材を増やしただけでなく、西部の病院や海外にまで出て奉仕をしている卒業生もいます」。

「私たちは人材を育成すると同時に、慈済の志業にも人材を留めていかなければならず、『情（人情）』を以て定着させる必要があります。慈済の学校の教師たちは誠意を込めて心から学生たちをケアしており、教師と学生の関係は、親が子供を導くように心を通わせているため、教師が学生に慈済に残るよう促すのです。卒業後も慈済志業で奉仕できれば、その情は永く続きます。各地の慈済病院の看護部が時間を作って学校に出向き、学生と交流することもしています。私たちが自分たちの子供を育てるように真心で接することで、人材が定着していくことを期待しています」。

上人は、学校と病院、四大志業が心を一つにし、共に慈済学校の人材を大切に育てていくようにと期待を込めました。

近頃、頻繁に慈済学校や慈済病院が賞を獲得していることを聞き、上人はこう言いました。

「地域性のものであれ、世界的なものであれ、賞を獲得するということは認められたことなのです。そして、病院の『査察評価』は自分を振り返る良い機会ですから、皆が心を合わせて協力し、普段からの奉仕の質や誠意で患者をケアする心構えと行動を示せばよいのです。慈済病院のレベルはとても高くなりました。私はいつも皆さんを信頼していますし、本当に認められる価値があると思っています。皆、四大志業一体を心がけていますから、その精神を維持し、心を合わせて協力すれば、様々な困難や挑戦を乗り越えることができるのです」。（慈済月刊六八四期より）

十二月と元旦の出来事……

この度の令和６年能登半島地震により
お亡くなりになられた方々にお悔やみを申し上げますとともに、
ご遺族の皆様と被災された皆様に心よりお見舞いを申し上げます。

訳・済運

12・01	慈済基金会仏国プロジェクトチームは、２０２３年５月に、ネパール・ルンビニ文化都市のアマ衛生所での井戸のさく井工事が終了すると、引き続き衛生環境と設備、運用状況に関心を寄せ、本日、ボランティアは、所内の人員と地域住民たちを連れて、周辺環境の清掃を行った。
12・02	チリの慈済ボランティアは、クリスマス高齢者ケア活動を行った。本日ペナロレン市にあるサンマリタノ養護老人ホームで、入所者たちと交流し、バスタオル等のクリスマスプレゼントを贈った。

12・03	◎政府教育部青年署は、「青年海外ボランティア奉仕優秀チームの交流と分かち合い会選抜活動」を行った。大きく３つのテーマに分け、入選した２７の青年団体を招いて経験を分かち合った。慈済基金会の「ＴＩＹＡシリアの愛・青年ボランティアチーム」は、「マンナハイの約束・シリア難民中国語学習付き添いプロジェクト」によって、奉仕成果と評価における最優秀賞と、チームの立ち上げと持続的な伝承における優秀賞の２項目を獲得した。 ◎アメリカ・ロサンゼルスの慈済ボランティアは、長期にわたって慈済少年たちを連れて、華人系障害者の保護者協会に所属する家庭をケアしてきた。本日、ラングレイ高齢者センターで、心身障害者に付き添って歌や体操などのレクリエーション活動を行い、早めのクリスマスを過ごした。

12・04	慈済基金会は11月のネパール地震災害で、被災地の学校の再建支援を行う。本日から順次、重被災地のカーナリ省ジャジャーコット県ベリ市のトリベニ中学校、ディペンドラ小学校及び西ルクム県アスビスコット市のヤナユワ小学校でプレハブ教室を建設する。
12・05	台北市万華区にあるカトリック教聖テレサ巡礼地教会のゴファート神父と、万大路にある玫瑰聖母堂のデ・リダー神父ら10人は、慈済万華静思堂を訪れ、慈済ボランティアと地域における慈善活動に関して交流すると共に、互いに持っている資源を報告した。
12・07	◎第28回国連気候変動会議に参加した慈済基金会の代表チームが本日、「グリーンホープ基金会のメンバーと共に、UAEの東部にあるマングローブ国立公園で28本の苗木を植樹した。 ◎アメリカ衛生・社会福祉部長と学者代表が花蓮慈済病院を参観し、慈済の慈善と医療の由来と、花蓮慈済病院が秀林郷で行っている「全人医療統合プロジェクト」の成果報告を聞いた。
12・09	慈済アメリカ・オースティン連絡所は、オースティン国際姉妹都市協会の招待を受けて、世界パスポートデーのイベントに参加し、本日、オースティン中央図書館にブースを設置して、慈済の志業と理念を紹介した。
12・10	第2回慈済国際青年永続年次総会が、「植境」複合式概念館で開かれた。「青年の永続・誓います！」を主体に、慈済の青年がサステナブルな未来に関心を持ち、行動して団結する姿勢を示すと共に、「SIMFO＋D-School」永続ワークショップ、民主的審議のワークショップを運営する。
12・14	慈済基金会2023年海外養成委員・慈誠精神セミナーの第4回が14日から18日まで新北市板橋と三重志業パークで同時に行われ

	た。マレーシア、シンガポール、ミャンマー、日本、トルコ、アメリカ、モザンビーク、レソト、ジンバブエ、南アフリカ、イギリス、フランス、オーストラリア等13カ国から464人が参加し、そのうちの373人が認証を授かった。
12・16	オランダ領セントマーティンの慈済ボランティアは、現地の教会（Cay Hill Church Of God）を支援して、離島のカイヒル地区の貧困世帯に関心を寄せている。本日、再び訪れて、台湾政府農業部の対外支援米と食用油等の物資を50世帯に配付して支援した。
12・17	慈済カナダ・モントリオール連絡所のボランティアは、初めてホームレスへの冬季配付活動を行った。本日、ヴェルダン地区とモントリオール中心街などで買い物カードと厚手の靴下、使い捨てカイロ及びサンドイッチなど食糧を12人に配付した。

12・19	慈済基金会はシエラレオーネ共和国貧困支援プロジェクトで協力している、カリタス基金会、ヒーリー基金会、ランイ基金会と共に、第7回宗教間論壇の会場で、3000人の社会的弱者たちに台湾政府農業部対外支援米を配付して支援した。
01・01	慈済基金会は、能登半島地震に対応して、1月1日の夜から直ちに食品と医薬品合計4・3トン（355箱）を準備した。毛布1980枚（198箱）、即席飯5キロ入り160パック（80箱）、即席お握り2650個（53箱）などに加え、台北慈済病院より延べ80人が14日間使用できる外用薬、痛み止め、咳止め、胃腸薬、血圧降下剤、血糖値降下剤、抗ヒスタミン剤、気管拡張剤などの医薬品24箱と医療機材が提供された。慈済日本支部は目下、積極的に被災地の災害状況把握に努め、支援が必要になれば、直ちに出発できるよう待機している。

各国の連絡所

本部
971 花蓮県新城郷康樂
村精舎街 88 巷 1 号
TEL:886-3-8266779/886-3-8059966
志業センター（静思堂）
970 花蓮市中央路三段 703 号
TEL:886-40510777 # 4002
0912-412-600 # 4002

花蓮慈済医学センター
970 花蓮市中央路三段 707 号
TEL:886-3-8561825
玉里慈済病院
981 花蓮県玉里鎮民権街 1-1 号
TEL:886-3-8882718
関山慈済病院
956 台東県関山鎮和平路 125-5 号
TEL:886-89-814880
大林慈済病院
622 嘉義県大林鎮民生路 2 号
TEL:886-5-2648000
台北慈済病院
231 新北市新店区建国路 289 号
TEL:886-2-66289779
台中慈済病院
427 台中市潭子区豊興路一段 88 号
TEL:886-4-36060666
斗六慈済病院
640 雲林県斗六市雲林路2段２４８号
TEL:886-5-5372000

慈済大学
970 花蓮市中央路三段 701 号
TEL:886-3-8565301

台北支部（新店静思堂）
231 新北市新店區建國路 279 号
TEL:886-2-22187770
慈済人文志業センター
112 台北市立徳路８号
大愛テレビ局
TEL:886-2-28989000
静思人文
TEL:886-2-28989888

アメリカ
総支部（San Dimas）
TEL:1-909-4477799
北カリフォルニア支部
TEL:1-408-4576969
ニューヨーク支部
（New York）
TEL:1-718-8880866

カナダ　Vancouver
TEL:1-604-2667699

メキシコ Mexicali
TEL:1-760-7688998

ドミニカ Santo Domingo
TEL:1-809-5300972

ブラジル Sao Paulo
TEL:55-11-55394091

イギリス London
TEL:44-20-88699864

フランス Paris
TEL:33-1-45860312

ドイツ　Hamburg
TEL:49(40)388439

オランダ　Amsterdam
TEL:31-629-577511

スウェーデン　Goteborg
TEL:46-31-227883

オーストリア　Vienna
TEL:43-1-7346988

南アフリカ　Gauteng
TEL:27-11-4503365

中国蘇州
TEL:86-512-80990980

香港
TEL:852-28937166

フィリピン Manila
TEL:63-2-7320001

タイ　Bangkok
TEL:66-2-3281161-3

ベトナム　Hochiminh
TEL:84-8-38535001

ミャンマー Yangon
TEL:95-1-541494

マレーシア
セランゴール支部　KL
TEL:603-62563800
ペナン支部　Penang
TEL:604-2281013

シンガポール
TEL:65-65829958

インドネシア　Jakarta
TEL:62-21-5055999
大愛テレビ局
TEL:62-21-50558889

スリランカ　Hambantota
TEL:94(0)472256422

ヨルダン　Amman
TEL:962-6-5817305

トルコ　Istanbul
TEL:90-212-4225802

オーストラリア Sydney
TEL:61-2-98747666

ニュージーランド
Auckland
TEL:64-9-2716976

慈濟

２０２４年１月１９日発行・３２５号
中華郵政台北誌字第９０９號執照登記為雑誌交寄
Printed In Taiwan

発行人　釋證厳
発行所　慈済基金会
〒 112 台湾台北市北投区立徳路 8 号
編　集　慈済日本語翻訳チーム
杜張瑤珍・陳植英・黒川章子・王麗雪
電　話　(886)02-2898-9000
FAX　(886)02-2898-9994
E-mail: 021620@daaitv.com

■

慈済基金会日本支部
〒 169-0072　東京都新宿区大久保 1-2-16
電　話　(03)3203-5651 ～ 5653
FAX　(03)3203-5674
E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw
tzuchi@tzuchi.jp

證厳法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈済に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本語への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示をいただければ幸いに存じます。（日文組編集同人）

ただ前へ進む　400人の子供にお腹を空かせないために

大雨の後、川は増水したが、モザンビークの慈済ボランティアは、小学校に給食を提供し続けるために、米を載せたバイクを押し、カヌーで川を渡った。2019年にサイクロン・イダイの被害を受けた後、慈済が支援建設したルイス・ホアキム・マラ小学校は、メクジ地区にある唯一の学校である。生徒は遠くから通学してくるが、家が貧しいのでいつも空腹を抱えていた。ボランティアは、2023年の3月から毎週水曜日、406人の全校生徒に温かい食事を提供している。（文・蔡睿和　撮影・ソアレス　モザンビーク・ニャマタンダ郡　2023年4月28日）

慈済日本サイト　慈済ものがたり